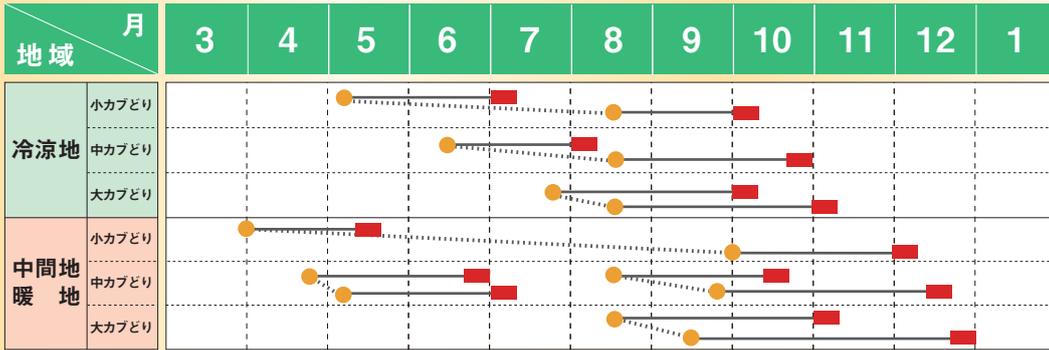


タキイのカブ栽培マニュアル



適期表記号説明

- : タネまき
- : 育苗期
- : 生育期
- : 収穫期
- : 適宜播種可能

カブの発芽と抽苔

発芽適温 20~25℃

最低温度4~8℃で発芽します。発芽は30℃以上の高温では著しく悪くなります。

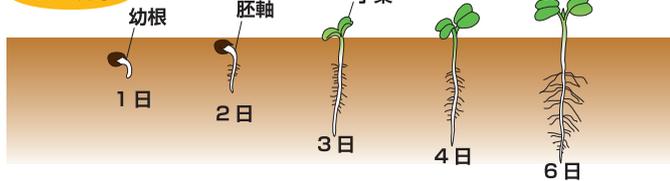
生育適温 15~20℃

冷涼な気候を好みます。耐暑性は弱く、25℃以上の高温では根の肥大悪く、病気も多発します。耐寒性は比較的強く、-3℃くらいまで耐えられます。



↑カブの発芽

カブの発芽



↑カブの発芽

第1本葉出始める

【カブの花芽分化】

種子が吸水し、発芽したところから低温感応しますが、幼苗期よりも、ある程度生育が進んだ大苗のほうが感応しやすくなります。一般には2~13℃で感応し、敏感なのは5~7℃前後とされています。また感応期間が長いほど、花芽分化とその後の抽苔は早くなります。抽苔は13~18℃で促進され、聖護院カブのような大カブ種は抽苔が早く、金町カブのような小カブ種は抽苔が遅い傾向にあります。



↑カブの花

【カブの脱春化作用（ディバーナリゼーション）】

夜間、低温に遭遇して低温感応しても、日中の高温によって低温の作用が打ち消されます。9℃の連続低温処理を24℃か30℃の高温で、4時間または8時間中断すると、4時間で低温処理効果の1/2、8時間で3/4が消去されます。低温期のハウス栽培やトンネル栽培はこの特性を利用してトウ立ちを回避しています。

【発芽のポイント】

適度な土壌水分の状態では播種し、覆土とまき溝の厚さを一定にして一斉に発芽させることが大切です。土壌水分が不足すると発芽が遅れたり、発芽ムラが生じるので、こまめに灌水しましょう。ベタがけ資材を利用するのも効果的です。

〈播種する時の注意〉



覆土は1cm程度を目安にします
(重めの土では、覆土を薄めにする)

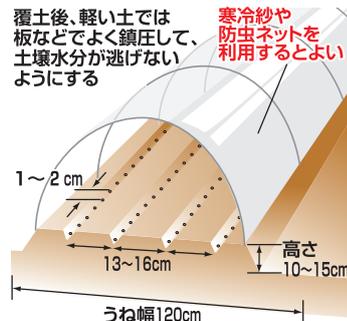
小カブ



↑カブのトンネル栽培

播種直後に、害虫の被害を防止するために被覆資材(防虫ネットや寒冷紗など)をトンネル全体に覆うとよいでしょう

播種

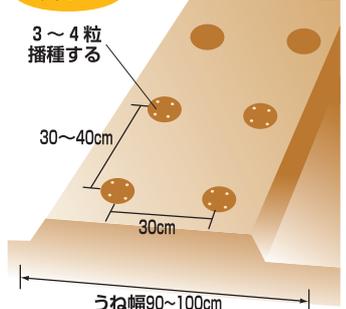


覆土後、軽い土では板などでよく鎮圧して、土壌水分が逃げないようにする

中カブ

中カブは条間20~25cm、株間15~20cmが目安。条まきか点まきするとよいでしょう

大カブ



3~4粒播種する

カブの品種と地域性

カブは、古くから栽培されており「すずな」と呼ばれていました。日本各地で品種が分化しており、地方野菜として定着しています。全国にカブの品種は80種以上あると言われています。

一般によく栽培されている白カブでも関東と関西では、利用する頻度が違います。関東では、小カブが好まれており、葉もみそ汁の具材に使うなど普段の生活に欠かせない野菜となっています。一方関西では、葉はあまり使われず中カブより大きなものが主に漬物として利用されます。



津田カブ

万木カブ

金町小カブ

温海カブ

カブの品種と分類



施肥量

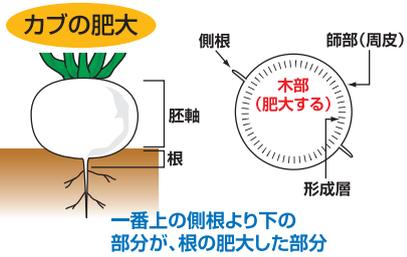
1回の栽培に必要な施肥量(全体)は、小~中カブの場合、10㎡当たり成分量がチッソ150~180g、リン酸150~200g、カリ110~150gが目安になります。大カブは、チッソ、リン酸、カリとも300gを目安に施用します。小~中カブでは、比較的栽培期間が短いので全量、元肥にすることが多く、大カブでは元肥2/3、追肥1/3で割合で3回程度追肥するようにします。

カブの生育

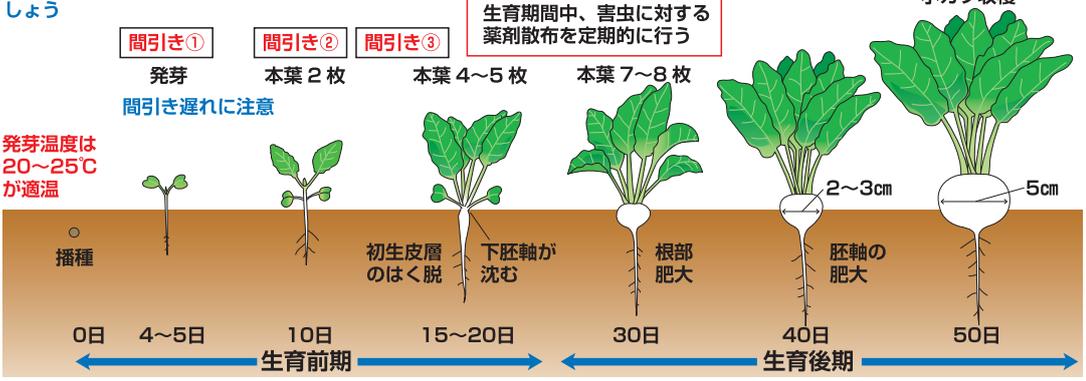
秋まき小カブ (適期)

生育適温 15~20℃
(冷涼な気温を好む)

間引きした葉は、やわらかくておいしいので汁の実やおひたしなどに利用するとよいでしょう

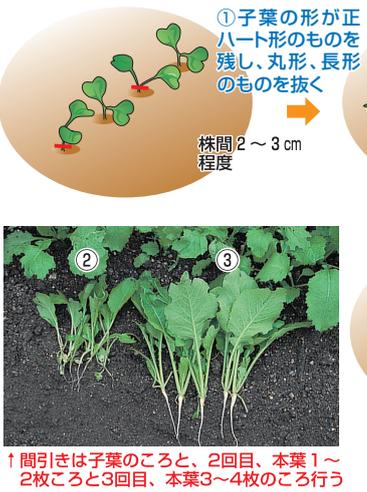


【カブの裂根の原因】
根の周皮(師部)の肥大が木部の肥大に伴わないときや、根の肥大の局所的な不均衡から起こります。生育後期に発生しやすく、栽培日数が長くなり、収穫が遅れると多くなります。生育初期に土壤水分や肥料が不足すると周皮が老化し、生育後期に降雨により土壤水分が多くなって急激に肥大が進むと裂根が多発します。裂根を防止するには、生育前期は乾燥を防ぎ、肥料や土壤水分が不足しないようにして生育を順調に進め、生育後期には土壤が多湿にならないよう畑の排水性を良好にしておくことが大切です。

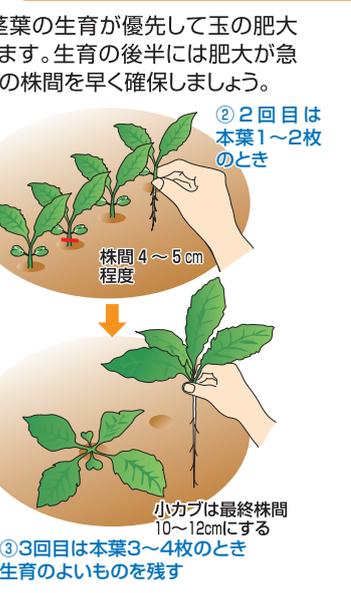


間引き

【間引きは早めに】 間引きが遅れると茎葉の生育が優先して玉の肥大が遅れ、低収量・低品質になってしまいます。生育の後半には肥大が急速に進むため、間引きによってやや広めの株間を早く確保しましょう。



小~中カブの間引きと生育



【発芽】 ダイコンと同じく、タネをまくと2~3日で発芽し、5日ぐらいで子葉が展開します。
【本葉3~4枚(最終間引き)】 根の肥大が開始され、初生皮層(根の外側の皮)に縦の亀裂が入り、皮は剥けていきます。その後、地上部に出ていた下胚軸が地下に沈み始めます。
【本葉4~5枚】 タネまき後、15~20日には下胚軸が地中にもぐり、株元はしっかりしてきます。
【本葉6枚以降】 初生皮層がはく脱して根の肥大が始まる6葉期以降、根部が肥大して収穫するまでが生育後期です。葉数の増加にともない葉長と葉重が増加した後に、葉重の増加を上回って根部が本格的に肥大します。
【収穫】 小カブであれば直径5cm以上、中カブでは8cm以上になれば収穫。裂根に注意します。

生育と肥大



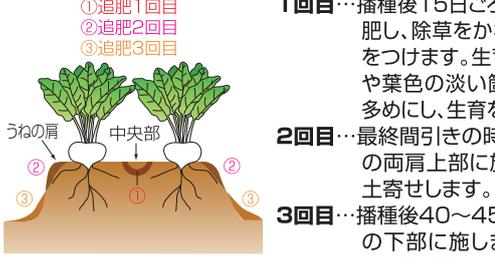
大カブの間引きと追肥

大カブは小~中カブより生育期間は長いですが、肉質は緻密で入りは遅くなります。適期であれば、播種後70~80日で収穫できます。6cmポットで本葉4~5枚まで育苗し、定植しても栽培できます。大きく根部を肥大させるには、肥効が切れないようタイミングのよい追肥が大事になります。



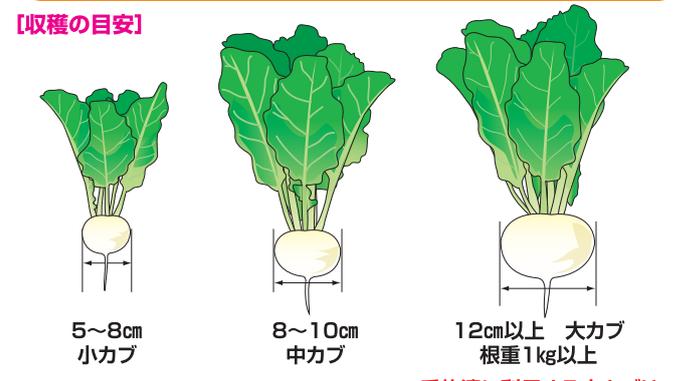
【間引き】
1回目...本葉2~3枚時、病害虫に侵されているものを優先して間引き、葉が触れ合わない程度にします。そのとき、株が倒れないように株元に土寄せを行うとよいでしょう。
2回目...本葉4~5枚時(播種後3週間程度)に、生育が中位のを揃えて残し、1本立てとします。

【追肥】 1回につきチッソ成分で30g/10㎡を目安に施用します。



【収穫の目安】 根重1kg以上 (根径12cm以上)

カブの収穫と根こぶ病



【収穫の目安】 干枚漬に利用する大カブは2kg以上のものを収穫します

カブの根こぶ病

アブラナ科作物に寄生する根こぶ病菌は、糸状菌(カビ)の一種で、土壤中に休眠胞子の形で5~10年間も生存するといわれています。特にカブの場合は、根に直接発病するため被害の大きい病害です。対策として播種前に畑に根こぶ病の薬剤を混和し防除するか、根こぶ病抵抗性品種が開発されていますので、品種名などにCR(Clubroot Resistance)の文字の付いた品種を利用するようにしましょう。

